

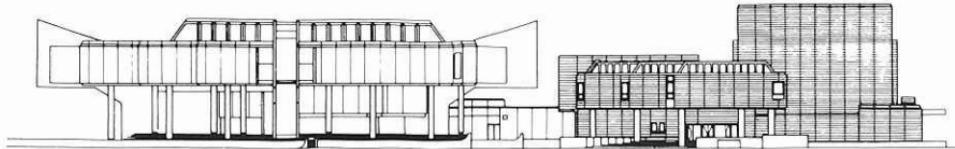
田の神さま（富士町）
平成12年12月初丑の日の前夜

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

10 March 2001

No. 126



調査ノート

子供の成長を願う行事

—佐賀県祭り・行事調査事業から—

「祭り・行事は、季節の中にあって、逆らわず、流されず、営まれている。その様子は、実に、四季折々に咲く花のごとし。

春、山から里に田の神さまをお迎えする。田植えの時期、水路は水で満たされ、人々は水神さまに感謝する。田植えが終まる。虫除けの祈願をする。収穫をひかえ風除けの祈願をする。秋、たわわに実った稻穂を前に人々は豊作を祝い、感謝する。そして田の神さまを里から山にお送りする。

こと、稲作にかかるわる行事は、稲の成育に合わせた一大絵巻を見るようでもある。」平成13年1月、冬。私はこんなことを思いながら調査にのぞんでいる。

平成11年度から3ヶ年計画で始まったこの国庫補助事業も、はや最終年度を迎えるとしている。今、一つの区切りとして調査報告をしようと思う。テーマは「子供の元気な成長を願う祭り・行事」。それは桃の節句や端午の節句の様に、一般によく知られた祭りではないけれど。

亥の子祭り

東松浦郡浜玉町野田（上組）

子供が生まれた年だけに実施される祭りで、新生児が男の子の場合は10月1番亥の日に、女の子の場合は同月2番亥の日と決まっている。

亥の子石と呼ばれる円錐状の石にカズラ製の網を四方に縛り付けたもの[写真1]で、亥の子唄を唄



写真3

いながら新生児の家の庭をつき[写真2]、穴（くぼみ）をあけて廻る。この穴の数は、新生児が男の子の場合は5個（奇数個）、女の子の場合は4個（偶数個）と決まっていて、その日の内はこれを踏んだり、またいたりしてはいけない。

実施するのは地区の小・中学生の男子。最年長者を総大将と呼び、亥の子石の近く、綱の根元あたりを持つ役4名を「根どり」と呼んでいる。総大将は石つきの前に盃の神酒に口をつけ、残りを亥の子石にあけた小さな穴に注ぎ入れるし、つき終わりには「こちらの（新生児の名前）さんは福世な生まれ、生まれおちるとヤーレ金蔵御殿」と唄い、祭りを締める。

亥の子石をついてもらった家は、お礼に御馳走をふるまい、お土産として文房具や饅頭などを渡す。

亥の子さま

東松浦郡七山村大白木

先の亥の子祭り（浜玉町野田）と同じく10月



写真1 亥の子石の中央には、神酒を入れる穴がある



写真2

1番亥の日に実施される伝統行事であるが、ここ七山村大木本地区では旧暦で実施される。実施するのは地区の小・中学生の男子。もち米の新しいわらで作ったトビを頭にかぶり、地区内の各家を訪問する。トビとは、わら小積の屋根部分の名称。これをかぶることで子供たちは稲の魂を持つとされる。玄関（土間）では「トービ、トビ、トビ」と叫びながらぐるぐる回り[写真3]、終わるとお菓子などをもらって次の家へ向かう。特に男の子が生まれた家（ここでは長男に限られる）では、トビを敷き相撲をとり（現在は実施されない）、料理を御馳走になる。

訪問する各家の玄関（土間／本来は荒神様の前）には箕が置かれ、菊の花、お神酒、やなぎ箸と共に、一升桶や小皿の上には、ほたもち、栗おこわ、なます、煮しめものなどが供ててある[写真4・5]。

県内の亥の日の行事は、いわゆる亥の子の節句とも呼ばれ、石つきや綱引きをする例が東松浦郡一帯に見られるものの、本例の様な実施形態は極めて特徴的である。

もぐら打ち

東松浦郡相知町平山上中

1月14日に実施される、小正月の伝統行事。

実施するのは地区の小学生の男子（近年、女の子も参加）。竹の先にわらを巻き、かずら（近年



写真4 箕の上方には荒神様の棚



写真5

はビニール紐）で結わえた、もぐら打ち棒で、地区内の各家の庭先を「もぐら打ち唄」を唄しながら叩いて廻る[写真6]。各家では、打ち終わることにお金をもらいうけ、全ての家を廻り終ると各自もぐら打ち棒を持ち帰り、二つに折って柿木などに下げる[写真7]。

本行事は県内の多くの地域で伝承され、いずれも「14日、もぐら打ち、餅出しが、酒出しが、出さねば嫁この尻叩き」などのもぐら打ち唄を伴うが、地区によっては訪問する家を男児の生まれた家に限定するところもある。

1月中旬、寒い。春はまだまだ遠いと思う。梅の木に目をやる、つぼみはすでにふくらみ始めていた。

(学芸員 山崎和文)



写真6



写真7

平成12年度 美術館の教育普及活動について

—ワークショップ「自画像を描こう！」とテレビ会議システムを利用した「鑑賞」の授業—

平成12年、佐賀県立美術館では教育普及活動の一環として、ワークショップの開催、および鑑賞の授業のサポートをおこなった。いずれも美術館初の試みであり、小規模であったものの、予想以上の反響があり、教育現場と連動した企画の重要性を改めて実感した。以下、それら各々の概要について簡略に記す。

ワークショップ「自画像を描こう！」

開催日：7月26日、27日

(2日間、午前・午後各1回ずつ)

本企画は6月28日(水)から7月30日(日)まで開かれた美術館常設特別展「こども美術館はひとがいっぱい!!」展とあわせて会期中に開催した。美術館所蔵の人物画をテーマとした同展にちなみ、展示室内で子どもたちに自画像を描いてもらうという内容である。

ワークショップの開催にあたっては、事前に広報をおこない、新聞・テレビ等で参加者を募ったが、予想を上回る申し込みがあり、結局、県内の保育園児から中学生まで、2日間で計194人が参加することとなった。

まずは子どもたちに特別展を鑑賞してもらい(作品に添付する解説文は平仮名を多く用い、内容も平明にするなど、子どもにも分かりやすいように工夫をしている)、多様な人物の描き方があ



「自画像を描こう！」に楽しそうに取り組む子どもたち

り、また画家が自画像を残したことの意味や理由などを学芸員が解説する。さらに、級友や引率の先生、学芸員の顔の特徴などを見つめさせ、数人に発表させる。ここまでが導入部で、その後、自画像の描画に入る。また、今回は鉛筆や画用紙、鏡といった描画に必要な道具類はすべて美術館で用意し、さらに、完成した作品は特別展会期中、展示室の壁面に飾ることとした。

子どもたちがどのような反応をしめてくれるのか、最初はやや心配であったが、実際は美術への関心度は驚くほど高く、解説も熱心に聞き入り、さらに学校外での制作ということもあってか、終始のびのびと、またきわめて積極的に取り組んでいた。

「みんなの顔は、ひとりひとり違うよ」「髪の毛がよく描けているね」「目がそっくりだね」など、製作中は子どもに積極的に声かけをおこない、興味の持続をうながすとともに、各々の作品のよい点を見つけ、評価するようにつとめた。また完成作は随時壁面に展示していくが、これが大好評で、美術館に自作が飾られることは、大部分の子どもにとって初めての体験であり、皆嬉しそうな、そして嬉しい笑みを浮かべていたのが印象的であった。

私たちが目指したのは“人が生きることの素晴らしさ”を伝えることー今回は絵画鑑賞・制作を通して、子どもたちに美術の情緒的な部分を強調して伝えてみたが、「美術をもっと知りたい、楽しみたい」という、子どもの知的欲求を満たすことについては、まずまずの効果があったように思う。

なお、ワークショップでは鍋島小学校教頭・杉浦健二氏、ならびに佐賀大学文化教育学部美術教育専攻・中西幸子さんに指導を補佐していただいた。

テレビ会議システムを使用した「鑑賞」の授業

開催日：12月12日

(午前9時30分～10時15分)

この授業は玄海町立有浦中学校の要請によりおこなわれたもので、美術館常設特別展「20世紀を描く・前編－風景－」の展示作品を、有浦中学校2年2組の生徒たちがテレビ電話～パソコンを通して鑑賞しながら、学芸員のギャラリートークを生中継で聞くという授業内容である。

授業設定の理由として教諭・増本淳子さんは、「美術館へ行ったことのない多くの生徒に、擬似体験ではあるが、美術館で作品を鑑賞するという体験をさせたい」ということをあげられた。玄海町は佐賀市にある県立美術館から70kmの距離にあり有浦中の生徒の大部分は美術館を訪れた経験がない。間接的な体験ではあっても“生きた”作品と展覧会の様子を見ることは、子どもたちにとって、美術に対するより幅広い創造力・感性を獲得する端緒となりうるだろう。これは学校のみならず、美術館としても非常に面白い試みであり、地域と美術館を結ぶ新たな手段として、高い効果が期待できそうである。なお、テレビ電話やスピーカー、配線などの機器支援は、電話会社のご厚意により提供していただいた。

授業はあらかじめ録画されていた特別展の飾り付けの場面から始まる。貴重な作品の取り扱い方法や展示のコンセプトなどを学芸員が解説し、展示がすべて終了したところで「ようこそ美術館へ！」と、展示室へ子どもたちを招く。そこから、テレビ電話による生中継のギャラリートークへつながる。展示作品の見どころなどの解説を終えた後は、子どもたちとの質疑応答である。「飾つてある絵の中で、一番高価なのはどれですか」「この作者は、なぜこんな暗い色を使ったんですか」「美術的に価値がある絵を、どうやったら見抜くことができるんですか」と、美術に対する素朴な疑問が数多く飛び出した。もちろんそれらの質問にできるだけ平明に答えるのだが、対象が中学生であったので、割合に専門的な内容のやりとりも可能であった。また、子どもにとって未知の職業



「テレビ会議システム（テレビ電話）」で作品を鑑賞する玄海中の生徒
今回は回線をパソコンにつないでの鑑賞となった。

である学芸員の仕事について、おおいに興味をおぼえた子どももいたようで、前回のワークショップの時と同じく、美術に対する子どもの興味・関心の高さが窺われた。

現在、全国の美術館・博物館施設では、より創造的な場づくりをめざして、様々な可能性の模索が続けられているが、その中でもっとも注目されるのが、「美術館教育」であるといえるだろう。各地で開催されている「こども美術館」やワークショップ、各種講座などはその例であるが、美術館がより親しみやすく、楽しく学べる場所になるために、私たちはこれまで以上に、鑑賞者との交流・対話を重視する必要があるだろう。

人と街と、ともに歩む美術館。それは子どもだけでなく、大人も楽しめる夢の創造空間になるだろう。本稿で紹介したさきやかな活動が、今後本館の教育普及活動について大きな一歩になりうることを、私は確信している。

(学芸員 野中耕介)

研究ノート

ヒスイ勾玉はどのように使われたか

佐賀県立博物館の所蔵品の中に唐津市宇木汲田遺跡出土のヒスイ垂飾がある。勾玉など10個の垂飾はどれも鮮やかな緑色のヒスイ（硬玉）製品で、弥生時代では、全国的にみても最高の評価が与えられる逸品揃いである。この宇木汲田遺跡の垂飾を参考にヒスイ勾玉とりあげ、弥生人のお洒落感覚とその時代背景を覗いてみよう。

縁に魅せられた人々

縁は神秘的な色だ。「みどり児」「みどりの黒髪」などの言葉が示すように、若さや生命の始まりを意味し、草木が芽吹く清新さをイメージさせる。ヒスイ垂飾が縄文時代から古墳時代まで数千年もの間、長く日本人の心をとらえたのは、なによりもその神秘的な色合いにあった。弥生後期に北部九州で一時ガラス勾玉が流行したが、よせんイミテーションであったから古墳時代にはすたれた。深く澄んだ天然の緑色や乳白色を滲ませた明るい草色がヒスイの魅力であり、一粒の小さな玉の中に魂を吸い取られるような妖しい透明な世界が広がっている。

原始・古代の垂飾を代表するヒスイ勾玉の多くは碧玉管玉やガラス小玉などと組合せて首飾りに用いられた。まれに、手首を飾ることもあった。ふつう首飾りといえば胸まで長く垂らすものもありそうだが、古墳時代の人物埴輪を見るかぎり、

なぜか女性も男性も着裝例はどれも首回りだけであって、胸まで垂らす例はない。弥生時代も同じだったのだろうか。そして、ヒスイ勾玉はきまつて主役の座にあった。

玉=魂という説がどこまで本当か知らないが、ヒスイ勾玉がとくに珍重された最大の理由はその神秘的な色の美しさと希少性にあったことは確かだろう。

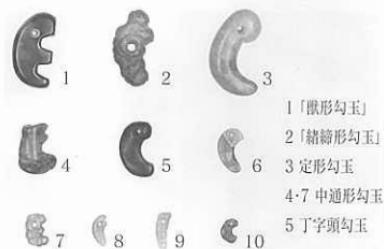
垂飾のワザ

勾玉は不思議な形をしている。背中をC字形に丸めて頭部に紐孔を穿け、文章中の「、」のようだ。だが、よく見るとその中には牙形、コ字形、獸形、さらには緒縫玉のように孔を多く穿けたものなど様々な形がある。もっとも多いC字形勾玉にしても、頭部に球状のくびれがあるもの無いもの、丁字頭と呼ばれる線刻の飾りがあるものなど変化がある。ふつう、これらをひっくるめてヒスイ勾玉と呼んでいる。

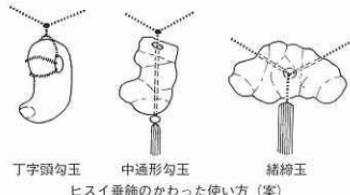
ところが一口に勾玉といつても、その使い方に少しずつ違いがあったようだ。まずはいわゆる「緒縫形勾玉」、これは明らかに勾玉とは違う。文字通り緒縫玉である。紐を両側から通し中央の孔で外に出して結び、房か何かの飾りを下げたのだろう。大粒で細工が派手なだけに、首飾りの中の主役として勾玉以上に華やかな装飾効果を生んだに違いない。また、勾玉の中には紐孔とは別に頭部から尾部に抜ける孔を穿いた中通形勾玉がある。これなども頭部から紐を下端に通し飾りを下げたと思われる。基本的な使い方は「緒縫形勾玉」と似ている。そして同様に、定形化されたヒスイ勾玉にも、ただ吊り下げるだけなく、その飾り方に細かな工夫が凝らされていたらしい。

定形勾玉と丁字頭

縄文時代の勾玉には個性的なものが多い。形はC字形、コ字形、し字形など様々で、内側にもう一つ突起をもつ「獸形勾玉」などはその最たるもの



宇木汲田遺跡のヒスイ垂飾（佐賀県立博物館蔵）



ヒスイ垂飾のかわった使い方（案）

のであろう。これら個性的のつよい勾玉の形は弥生時代にも受け継がれており、宇木汲田遺跡の垂飾群の中にも縄文系の垂飾が含まれている。そしてこのような縄文系勾玉の中から、頭部が丸く全体がC字形に整った、いかにも勾玉らしい形の定形勾玉が北部九州で成立する。

ところで定形勾玉には、頭部に紐孔から放射状に三重の線刻を施した「丁字頭」と呼ばれるタイプがある。おそらく元々は勾玉を吊り下げるための仕掛けであって、その形儀化したものではないかと考えている。というのは、勾玉の中には頭部に切込みを入れたものがあり、孔に紐を通して頭部で一旦くっつて吊るすこともあったと思われるからだ。その場合は当然、紐孔で直接吊り下げるとはしない。勾玉の位置は固定されることになる。「丁字」であることについては、単なる装飾ではなく、実際、紐を三重に回して吊るしたことがあったかもしれない。

そのように見ると、ちょっとした工夫で弥生人のこだわり、お洒落感覚がしのばれて楽しい。

勾玉はどちらが正面か

ついでに、勾玉はどちらを向けて使うべきかということにも触れておこう。勾玉を首飾りにみると分かるが、ある程度重さのある管玉などで両側から挟みつけないと、曲がった尾の先は左右どちらにも向く。実に不安定である。だが、古墳時代の人物埴輪の首飾りを見るかぎり、勾玉は丸玉と組み合わさってどれも先端をきちんと前方に向いている。弥生時代でも、どうやらこれが正しいようだ。丁字頭勾玉の線刻飾りが頂部より内側にあるのも「獣形勾玉」の内側突起も、吊り下げたときの正面観をつよく意識したためであろう。

勾玉の祖形についてはいくつかの説があるが、もっとも可能性が高いのは、縄文時代に実際使用例のある猪の牙を用いた垂飾だ。猪牙の先端は鋭い。もし、そこに除魔の意味があるとしたら、弥生時代の勾玉にも同じ思想が受け継がれていたのではないか。その意味では、正しく着装したとき尾の先端が正面を向くコ字形や二字形の異形勾玉こそ勾玉本来の意味を伝えるものかもしれない。

ヒスイ勾玉の値段

ヒスイ勾玉の分布は、縄文時代には東日本が中心であったが、弥生時代になると西日本、とくに北部九州が中心となった。しかも北部九州のヒスイ勾玉には、宇木汲田遺跡のように粒揃いの極上品が多いという特色がある。

全国で出土するヒスイ垂飾の殆どは、新潟県糸魚川産の原石が使われている。弥生時代、遅りすぐりのヒスイ原石が遠く北陸から北部九州に運ばれ、勾玉に加工された。そして、朝鮮半島の碧玉管玉と出会って首飾りの新しいスタイルを確立し定形化した。二千kmを旅して北部九州に多くもたらされた高品位のヒスイは、弥生時代に朝鮮半島との交易が始まり、北部九州が重要な拠点となつた結果、その経済力が高まったこと、そしてヒスイが重要な交易品であったことを物語っている。1個のヒスイ勾玉を得るのに、鉄や米など、一休どれほどのものを必要としたか計り知れない。

またヒスイ勾玉は、邪馬台国の女王卑弥呼が中國王朝に贈った品々にも含まれていたらしい。「青大句珠」がそれだ。そして古墳時代になると国内だけでなく、大量のヒスイ勾玉が朝鮮半島に運ばれ、新羅王家の宝冠を飾った。まさにヒスイ勾玉は、縄文から弥生、古墳時代へと時代の移り変りを見守ってきた歴史の証人である。

それにしても実際、ヒスイ原石はいかにして北部九州にもたらされたのか。原始・古代の宝石中もっとも加工困難な硬玉ヒスイの勾玉が何處で作られたのか。そしてどのような社会的、政治的背景で流通したのか等々。ヒスイの神秘的な色のように謎は尽きない。（学芸課長 田平徳栄）

平成13年度の展示から

■美術館常設特別展（美術館2・3号展示室）

◎「美術館でさがそ！—おおきい・ちいさい—」

平成13年7月6日(金)～8月26日(日)

夏休みに行っている「こども美術館」の3回目。今年は、絵や彫刻、やきものや発掘された考古資料などを集め、大小さまざまな形や表現を比べてみます。親子で楽しめる展覧会です。

◎「時代をえがく—肥前佐賀の絵師—」

平成14年2月1日(金)～3月10日(日)

江戸時代に佐賀で活動していた有名無名の絵師たちの系譜を、県内外に残る作品によって紹介します。



色絵婦人像（大・小）

■美術館常設展

◎郷土の画家たち（美術館2号展示室）

「季節の詩（うた）」 平成13年4月18日(水)～5月27日(日)

「過ぎゆく夏」 平成13年8月29日(水)～9月20日(木)

「近代の洋画」 平成13年11月30日(金)～12月24日(月・祝)

「高木背水」 平成14年3月15日(金)～4月14日(日)

◎その他（美術館3号展示室）

「近代・現代の書—所蔵作品を中心に—」 平成13年11月30日(金)～12月24日(月・祝)

「古沢岩美—原風景—」 平成14年3月15日(金)～4月14日(日)

■博物館企画展（美術館2・3・4号展示室）

◎「弥生都市はあったか—撲点環濠集落の実像—」

平成13年10月26日(金)～11月25日(日)

吉野ヶ里歴史公園の開園を記念して、15年にわたる調査の成果を総括するとともに、全国の代表的環濠集落の出土品を一堂に展示紹介します。

■博物館テーマ展（博物館3号展示室）

絵画「百年前の人気絵師 成富椿屋」 平成13年4月10日(火)～5月27日(日)

工芸「佐賀のガラス」 平成13年5月29日(火)～7月15日(日)

自然史「佐賀の野鳥」 平成13年7月17日(火)～9月20日(木)

考古「甕棺が大きくなる」 平成13年10月11日(木)～12月2日(日)

民俗「漁撈絵尽—有明と玄界—」 平成13年12月4日(火)～平成14年1月14日(月・祝)

歴史「肥前の中世文書Ⅲ」 平成14年1月16日(水)～2月24日(日)

考古「墓は語る 弥生首長墓と初期古墳」 平成14年2月26日(火)～4月14日(日)